

サポクラ 通信

令和5年(2023年)9月号

今月の内容は...

- ・パールの奮闘記1
- ・猛禽・アカハナ あれこれ5
- ・飼育と展示8

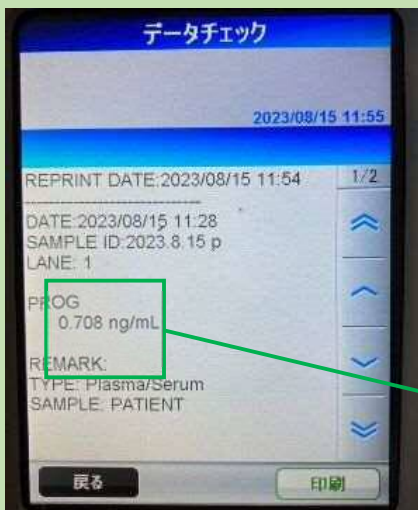
パール🐘の奮闘記🐘

サポクラ会員の皆様、こんにちは！アジアゾウ担当の沖野です。
いつもたくさんのご支援をありがとうございます。
長い夏がやっと過ぎ、秋の気配を感じる今日この頃です。
秋といえば、
(私は)食欲の秋ですが、ぜひ今年は“動物の秋”にしませんか？



今月のサポクラテーマは…もちろん！
パールの出産と仔ゾウについて、たっぷりとお伝えしていきたいと
思います。

出産目前！



出産直前に急降下するといわれている血中ホルモンの数値に、今までと明らかな違いがみられたのが8月15日。
この日を心待ちにしていた職員も、「きた！きたきた！！」と興奮を抑えられませんでした。
ゾウ舎を閉館し、パールが安心して出産に臨める環境づくりを進めました。

血中ホルモンを測定する機械の検査結果。
この数値が 13日 1.96 → 15日 0.708 に急降下しました

そして来たる8月19日の朝。
今までと明らかに違う兆候を見つけました。

粘液栓の排出。

出産が間近に迫ると、子宮に細菌等が入り込まないように子宮頸部に栓をしていた粘液が陰部から排出されます。
一緒に写っているのはSサイズの軍手で、長さ約22cm。
手のひらいっぱいの粘液…陸上最大の動物は、粘液の量も最大のようです。



ついにその時が…

同日 21:50 頃に本格的な陣痛が始まり、関係職員に招集がかかります。48 分間の陣痛ののち、22:38 に破水。○部分の地面が濡れています。

初産なので、長期戦になる覚悟もしていたのですが…
なんとパールは破水してから約1分後、22:39 に無事一頭の仔ゾウを出産。

初産とは思えない、超スーパー安産でした。



**娩出直後、動かない仔ゾウを
遠くから見ているパール**

しかし、まだ安心はできません。

娩出の直後、仔は呼吸をしていません。母ゾウは、生まれた仔の呼吸を促す必要があります。

パールは、出産直後、仔ゾウから離れた場所に立っており、このまま何もしなかったらどうしようと少し心配になりました。。が、

しばらくすると、仔ゾウに砂をかけたり、前足で刺激したり、しっかりと仔ゾウの呼吸と起立を促そうとしていました。出産直後こそ、興奮した様子を見せましたが、段々と落ち着いてきます。

仔ゾウのそばに立ち、その姿は仔ゾウが立ち上がるのを見守っているようでした。



**仔ゾウがうまく立てるよう、
前肢で支えるようにそばに立ちます**



やった！立てました！！

出産から約 10 分後の 22:49。

ついに仔ゾウは自力で立ち上がりました。

ポール越しにいたシュティンとニヤインも、この時までずっと見届けていました。

約 1 時間後には、初めての授乳も確認でき、モニター越しに見守っていた職員たちも「もう安心だね」と、胸をなでおろしました。

次に繋がるパールの出産

シュティン ニヤイン



当園にはパールの他にシュティンとニヤインというメスのゾウが暮らしています。シュティンは出産を経験していますが、ニヤインは未経産。

野生ではメスゾウが十数頭の群れを成し、協力し合いながら子育てを行います。出産経験のないゾウは、群れの中で出産や授乳、育児の様子を間近で見ながらたくさんのことを学び、自らの出産時にその経験を活かします。

ゾウは妊娠期間・授乳期間がとても長いため、一生のうち最大でも5～6回しか出産することができません。その貴重な1回を、パール越しではありますがニヤインに見せることができました。

現在オスのシーシュとニヤインの同居訓練も実施しており、いつかニヤインが出産を迎えるとき、今回の経験は必ず役に立ちます。

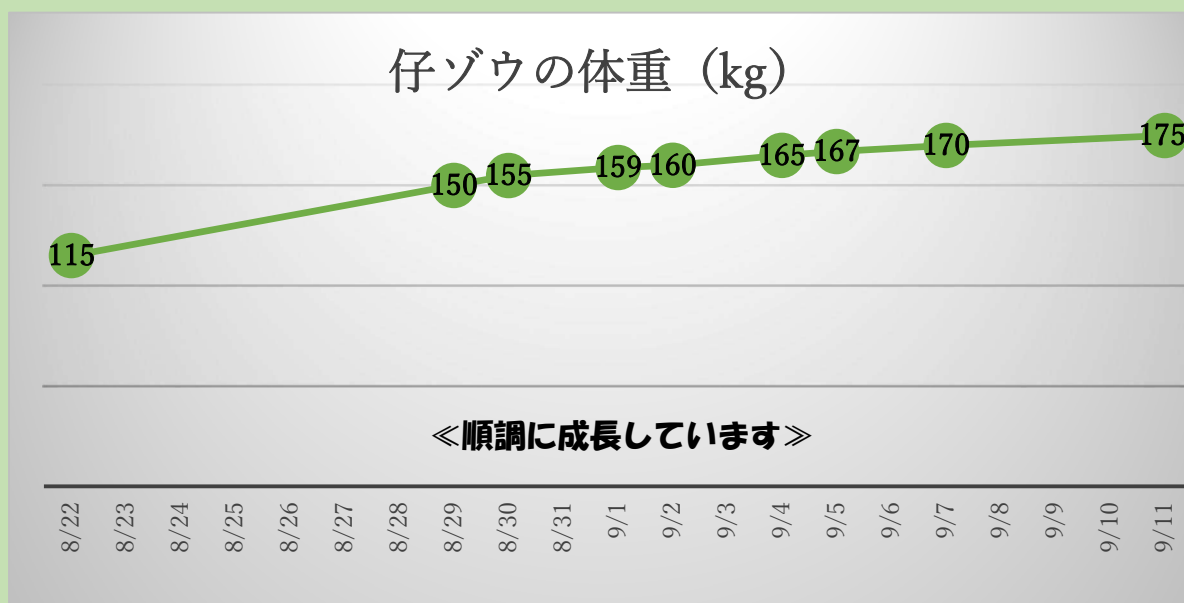
最近の母と仔

仔ゾウはあっという間に生後1か月を迎えました。

パールのそばを離れ、1頭で過ごす時間も長くなってきました。鼻の使い方も少しずつ上手になっており、地面から枝や草を拾って鼻で持ち上げています。

最近では、パールの後肢にじゃれるのがブームのようで、パールに軽く蹴られているのも微笑ましいです。

授乳も定期的に確認できており、毎日2kgペースで体重が増えています。やっぱり水は好きなようで、ホースで水をかけると気持ちよさそうに水浴びします。走るスピードも、とても速くなりました！





《熟睡中 z z z》



《パールの削蹄中、
ひょっこり顔を出してきました》



《休園日、初めて外に出ました》



《パールと一緒に放飼場の探検です》

最後に



絶滅危惧種であるアジアゾウを保全することは、動物園の取組だけでは不可能です。

一般公開も始まり、今後たくさんのお客様にパールと仔ゾウを見ていただけたらと思いますが、ぜひ、『かわいい』で終わらせないでほしいです。

私たち人間の活動が自然環境を破壊し、生物多様性が失われていることもあります。円山に暮らすゾウや他の動物の姿を通して、野生で生きる動物のことを考えることができると思います。そこから、私たちが住む地球について考えるきっかけにしてほしいと思います。

最後になりましたが、パールの出産に際しまして本当にたくさんの方の温かいご声援をいただきありがとうございました。これからも、どうぞよろしくお願いいたします！！



猛禽・アカハナ あれこれ



サポートクラブの皆様、いつも応援していただきありがとうございます。

猛禽類・アカハナグマ担当の菊池です。

今回は猛禽の新たな取り組みとアカハナグマの近況についてお知らせします。

TOPIC

- ①シマフクロウ親子同居繁殖
- ②オオワシプログラム新たな挑戦：飼育下繁殖個体の越冬地試験放鳥
- ③アカハナグマの近況

① シマフクロウ親子同居繁殖

円山動物園では2021年から毎年シマフクロウの繁殖に成功しております。シマフクロウが落ち着ける環境(猛禽類野生復帰施設)があり、適切な時期に質の良い餌(活魚など)を豊富に与えることで安定して繁殖ができているのだと思います。



しかし、毎年繁殖していると別の問題が出てきます。

通常、フクロウ類を繁殖させる時は、闘争を防ぐためにも前年生れの幼鳥を親鳥から分けますが、飼育スペースには限界があります。

一般的に幼鳥を分けることができなければ、親鳥は繁殖を行わないだろうと言われていたのですが、研究者によるとシマフクロウは長い時で生まれてから1年以上親の近くにいることもあるようです。

十分な餌があれば、闘争は行われぬのでは?と推測し、前年生まれの幼鳥と親鳥とを同居させた状態で繁殖に取り組みました。(闘争に備えて隔離場所も用意しました。)

繁殖時にオスがメスのために運ぶ餌(求愛給餌)を幼鳥がもらいにくることが多く、オス親はいつもよりも忙しかったと思いますが、今回は闘争することもなく無事孵化に至りました。幼鳥は、今年生まれのヒナに興味津々のようで、巣立ち後のヒナにくっついて観察していました。

野生復帰施設

ガイドツアー実施中!

現在は野生復帰施設で5羽のシマフクロウを飼育中です。幼鳥と成鳥を一度に観察できる機会は今しかないのでぜひ参加してみてくださいね。

②オオワシ・プログラム新たな挑戦：飼育下繁殖個体の越冬地試験放鳥



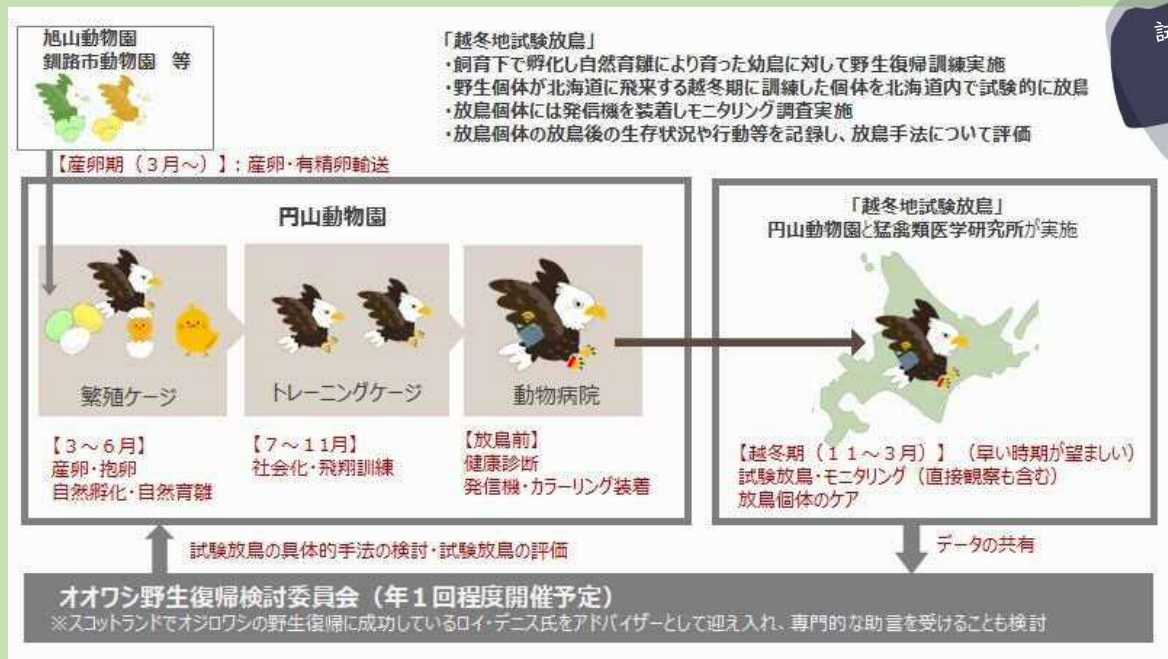
円山動物園では、当園で繁殖したオオワシを繁殖地（ロシア）で放鳥する計画（オオワシ・プログラム）を進めてきました。しかし、ロシアの社会情勢が悪化したため繁殖地で放鳥事業を進めることが難しくなりました。情勢の回復を待つ間にもオオワシの個体数は少しずつ減っています。

そこで、今できることとして「**飼育繁殖個体の越冬地（北海道）における試験的な放鳥**」に挑戦することになりました。

オオワシのような渡り鳥を野生復帰させる場合は繁殖地（ロシア）での放鳥が基本とされていますが、渡りのルート決定に繁殖地の刷り込みがどの程度影響するかについては明らかにされていません。

そのため、越冬地である北海道において、飼育下繁殖したオオワシを試験的に放鳥し、モニタリングを行うことで、オオワシの渡り行動における刷り込みの影響についての科学的知見を得ることを目標にして実施いたします。

※傷病保護個体に対しては、野生で自活できるよう鷹匠の技術を応用してトレーニングを行い、野生復帰に成功している実績があります。



トキやコウノトリは野生復帰技術が確立する前に絶滅してしまっています。オオワシでも同じことを繰り返さないように、いざという時に備え、野生復帰技術を持っておくことはオオワシの保全のために大変意義のあることだと考えています。

試験放鳥がスタートしたらモニタリングの様子をお知らせしたいと思いますので、動物園で生まれた個体が野生でどのように生きていくのかをぜひ見守っていただければ嬉しいです。

③アハナグマの近況

4月からアカハナグマも担当することになりました。

猛禽とは習性も接し方も全く異なるため毎日発見の連続です。

現在飼育中の個体は高齢なこともあり(11歳)※寿命は野生で7年、飼育下で14年程度

様々な持病を抱えていますが、できる限りのケアをして快適に過ごしてもらえるように精進します。

目が届かない時間もあるので、何かお気づきのことがありましたら何でもお知らせいただくと嬉しいです。

最近ではメスのアカハナグマ2頭が体調を崩していましたが、
(「ボニータ」:再生性貧血、「ベロニカ」:慢性腎不全)
適切なケアと治療により無事回復することができました。

特にメスのアカハナグマ「ボニータ」は、当初、全く食欲が無く頭を悩ませていましたが、野生下では無脊椎動物も食べるため、園内でトンボやミミズを採ってきて与えたところ、これだけはもりもりと食べてくれ、とても安心しました。それからは飼育員・獣医師で毎日トンボやミミズの採集に出かけました。



トンボやミミズに勢いよく
食いつく「ボニータ」



久しぶりに再会する
「ボニータ」と「ベロニカ」



やがて少しずつ果物やドッグフードも食べてくれるようになり、体調が回復し無事動物病院から退院することができました。

退院後にベロニカとボニータが久しぶりに再会した時にはお互いの匂いを念入りに嗅いで鳴き合い、再会を喜んでいるようでした。アカハナグマのメスは群れて行動するため、再会して安心したのだと思います。この日はいつもよりも2頭がぴったりと寄り添っていました。

「ボニータ」にはてんかんの持病があり足のふらつきも度々みられるため、木組みや階段を低めに設置し、丸太には人工芝を巻いて足が滑りにくいようにしています。

現在は、熱帯鳥類館で元気なアカハナグマ(オス1頭、メス2頭)をご覧くださいので、ぜひお越しください。



軽快な足取りの
「ボニータ」と「ベロニカ」



飼育 と 展示

いつもご支援ありがとうございます。

アムールトラとユキヒョウを担当しています、工藤です。

今回は寒帯館における「飼育」と「展示」についてご紹介いたします。

「飼育」

飼育とは動物を飼い育てること全般を言いますが、細かく分けると「飼育」というものは項目が多くあります。ここでは寒帯館における飼育管理の一部をご紹介いたします。

動物知識:まず動物について知ることはとても大切なこと。目についたネコ科に関するものやトラ・ユキヒョウに関する本や論文は時間を取り、都度読むようにしています。



本の一部

栄養管理:多くの肉食獣は野生下で1日0回~2回程度狩りをし、一度に多量の餌を採取します。しかし飼育下では、身近な肉食獣であるイエネコにおいて消化器官の負担を減らすためには少量頻回給餌が推奨されていることや管理の面、採食時間を延ばすことも含め、当園では1日3回給餌を行っています。(時にはエンリッチメントとして1日1回や5回給餌とするなど変化もつけています)

さらに野生下、飼育下ともに季節によって餌の必要量は変化するため、月に1度程度餌量や質の見直しを行っています。

2023.9.3～	日	月	火	水 Max.	木	金 Min.	土
トラ	馬 1.0 ^g	馬 1.0 ^g	馬 1.0 ^g	馬 1.5 ^g	馬 1.0 ^g	馬 1.0 ^g	馬 1.0 ^g
トート (オス)	馬 1.5 ^g	鶏+馬 (補) 1.5 ^g	馬 1.5 ^g	馬 2.5 ^g	鶏+馬 (補) 1.5 ^g	馬 1.5 ^g	鶏+馬 (補) 2.5 ^g
	鶏+馬 (補) 3.0 ^g	馬 3.5 ^g	鶏+馬 (補) 2.5 ^g	鶏+馬 (補) 3.0 ^g	馬 3.0 ^g	鶏+馬 (補) 2.0 ^g	馬 2.5 ^g
	計 5.5 ^g	計 6.0 ^g	計 5.0 ^g	計 7.0 ^g	計 6.0 ^g	計 4.5 ^g	計 6.0 ^g
ユキヒョウ	鶏一羽 (骨なし)	鶏一羽 (骨なし)	鶏一羽 (骨なし)	鶏一羽	鶏一羽 (骨なし)	鶏一羽 (骨なし)	鶏一羽
シジム (メス)	+馬 (補)	+馬 (補)	+馬 (補)	+馬 (補)	+馬 (補)	+馬 (補)	+馬 (補)
	計 0.5 ^g	計 0.8 ^g	計 0.5 ^g	計 1.2 ^g	計 0.5 ^g	計 0.8 ^g	計 1.0 ^g
MP	馬 5 k g	馬 5 k g	馬 5 k g	馬 5 k g	馬 5 k g	馬 5 k g	馬 5 k g
	鶏 2 羽	鶏 2 羽	鶏 2 羽	鶏 2 羽	鶏 2 羽	鶏 2 羽	鶏 2 羽

※ 鶏=足先・手羽除去。内臓・骨などは与える

g

トラ total=40 k g (先月+10 k g) 一週間の一日平均=5.714 k g (先月+1.428 k g)

シジム total=5.3 k g (先月+1.1 k g) 一週間の一日平均=0.757 k g (先月+0.157 k g)

g

現在の寒帯館の餌表

獣舎清掃: 日々、衛生的に保つことで動物たちの病気にかかるリスクを減らせるように毎日掃除をしています。清掃中に糞や尿、においから得られる動物の体調のヒントは見逃さないように心掛けています。

安全管理: 寒帯館では猛獣を扱っているため、一つのミスが命取りになると考えています。そのため、扉の開け閉めなどを誤ることのないように扉に分かりやすく色付けをしたり、常に考えながら扉の開閉や動物、人の移動を行っています。



色分けされた扉

状態観察: 飼育員の1日のスケジュールは密になっていることが多く、動物の状態観察は大切ですが、それだけに長い時間を割くことは難しいです。そのため、ほかの場所や獣舎へ移動するときは遠回りをしてでも動物の状態を確認することを心掛けています。もちろん、時間があればじっくり動物を観察しています。

健康管理: 日々の観察に加えて、寒帯館の動物たちはハズバンドリートレーニングにも積極的に取り組んでいます。彼らに直接触れるためには飼育員や動物の安全のため麻酔をかける必要があります。そのため、無麻酔下でも可能な限り彼らの体調管理を行っていくことは猛獣を飼育している寒帯館において重要なことだと考えています。

※ハズバンドリートレーニングとは:動物に協力をしてもらい、動物の日々の体調管理やケアを行っていくこと。例えばトラなどの猛獣動物の爪を切るときは動物に負担のかかる麻酔をかける必要がありますが、ハズバンドリートレーニングを行っていれば動物に協力をしてもらい、無麻酔で行うことができます。



吻(ふん)タッチ(基本的動作)を行う
アムールトラ



爪切り準備万端のユキヒョウ

「展示」

飼育員にとって動物を飼育管理することも重要ですが、動物の展示をしっかりと行うことも大切だと考えています。地球上に数が少ない絶滅危惧種である彼らを飼育するうえで、彼らの生態や本来の生息地、そして彼らの現状についてなどを伝えることはとても重要です。

ここでは寒帯館における展示の工夫をご紹介します。

・アムールトラとユキヒョウ獣舎の違いを一目でわかるように。

トラが持っている特徴的なトラ模様。これは多くの木々に紛れて獲物から身を隠すためにあります。そのため、彼らが生息しているのは木々が茂っている密林であることが多いです。

アムールトラはトラの中で最も寒冷地に棲んでおり、木々が少ないためトラ模様の数は少なくなっています。

対してユキヒョウは世界で最も高山に棲む大型ネコといわれており、植物はすでに森林限界を超えた標高4000m前後に生息しています。そのため、木はほとんどなく、植物といえばイネ科や花など険しい環境に適応した数少ないものばかりが生えています。そしてユキヒョウは別名イワヒョウともいわれており、ゴツゴツした岩に面した険しい環境に棲んでいます。

それらの違いを、目で見てわかるように展示の工夫をしています。



左:アムールトラの屋外展示場 右:ユキヒョウの屋外展示場

- ・1つは生息地ゾーン、1つはエンリッチメントゾーン。

当園のアムールトラ、ユキヒョウ飼育施設には幸いなことに2つ以上の屋外展示場があります。そのためそれぞれにコンセプトを持たせており、1つは生息地をイメージした展示場、もう1つは環境エンリッチメントに特化した展示場としています。特にユキヒョウ放飼場ではわかりやすく使い分けができており、屋内観覧通路に面している広い方のガラス面展示場(メイン1)では生息地をイメージしたガレ場を再現し、高山植物も数点植えています。一方、屋外観覧通路に面している格子状の展示場(メイン2)では動物福祉向上のため、人工物を用いて様々な刺激を与えられるような工夫をしています。

※環境エンリッチメントとは:飼育環境に工夫を加えて、環境を豊かで充実したものにしようとする試みや動物福祉の立場から飼育動物の幸福な暮らしを実現するため方策。



左:ユキヒョウのメイン1に
生えているアキノキリンソウ
(実際の生息地にも生えている)
右:ユキヒョウのメイン2の人工物
である樽で休むユキヒョウ

- ・看板(サイン)の違い

看板でも違いの出るように、アムールトラ側に設置している看板は自然木をそのまま使用するようにしています。一方ユキヒョウ側ではイワヒョウ感を出すためにモルタルで作った石のようなものを使ったり、実際に石を使って伝えるようにしています。



上左:丸太を使用したアムールトラの
体重結果

上右:切株を使用したアムールトラの
個体紹介



下左:モルタルで作ったユキヒョウの体重結果

下右:石を使用したユキヒョウの展示個体紹介

以上、今回は寒帯館における飼育や展示の工夫をご紹介いたしました。

今後、動物園でご覧になる際は、ぜひこれらの特徴にも注目してじっくり観察してみてください。

今年も

「世界ユキヒョウの日」イベントを開催いたします！

追記

詳細は日にちが近くなりましたら HP にてお知らせいたします。

お時間のある方は、ぜひご参加ください。